

生活美術館

京都新聞 平成10年8月1日

東山の峰々を生けどる借景の庭。 「聴風観山」の心で自然に向きあう暮らし。

「自然とふれ合う生活」は、いまや豊かな暮らしを考えるうえで大きなキーワード。花を生けたり、庭やベランダスペースなどでガーデニングを楽しむ人が増えるなか、北区在住の造園家・小野陽太郎さんは、暮らしに自然を取り入れる方法はもちろん、その微妙な移ろいや生命の営みを感じ取る「人の心のありよう」に熱い視線を注ぐ一人。人と自然の深いかかわりを改めて感じさせてくれる小野さんの庭造りを紹介します。

見えない風の声を聴き 不動の山の移ろいを観る

洛北鷹ヶ峰をさらに山手へ。市街地を一望する高台に、小野邸があります。圧巻は、如意ヶ嶽の大文字を正面にとらえ、東山の峰々を窓のフレームに収める客間。巧みに配置された庭の木や石が望遠レンズの焦点となって遠くの山を自庭へ「生けどり」にし、見事な借景を見せています。

この家は、医師だった陽太郎さんのおじいさまが、庭好きが高じて造ったもので、実は陽太郎さんに造園家になることを勧めたのもこのおじいさまだとか。「植木屋は



長生きするっていうのが祖父の持論だったんですが、最近その説もまん

京都市北区／小野陽太郎さん 千都恵さん

ざらウソではないな、と感じるようになって。庭師は木や草や石を相手に、そのリズムに添って仕事を。自然に逆らわないからストレスも少ない」と陽太郎さんは笑います。

姿のない風の声に耳を澄まし、動かない山を見て移ろう季節に気づく。陽太郎さんの座右の銘である「聴風観山」の心はこの三十年間、庭造りだけでなく、古武術や尺八、陶芸によって磨きがかけられ、その弟子たちは海外を含め二百人に上りました。敷地内にある道場・聴風館と観山寮では、現在も二十代から三十代の若者が、陽太郎さんから自然に對峙する心を学んでいます。

寸庭の心

そこかしこに造園技術の粋を凝らした小野邸ですが、ひとときわ目を引くのが玄関前のつくばい。手を清めると地中に埋めた瓶に水が流れ落ち、かすかに琴に似た音が響くとい

「水琴窟」が用いられています。

「最近では騒音が多いためか、拡声器をつけて聞

こえやすくすることもあるそうですが、それでは意味がない。水琴窟は本来、小さな音色に耳を凝らすことで心を澄まし、自然や自分自身を見つめ直すための装置なんですから」と嘆きます。

「造園には「寸庭の心」という言葉があって、どんな狭い庭でも、また木一本、石一つであっても、季節の移ろいや生命の力を感じとろうとする心があれば、それが庭なんです。逆に人の心がとき澄まされていなければ、どんな広大な借景の庭でも、木々に囲まれた森の中においても、自然を感じ、一体となることはできません」。陽太郎さんの言葉に、私たちは、自然そのものだけでなく、その営みを見つめる感受性をも失いつつあることに気づかされます。

